

保育者の自然観はいかにして形成されるか？ (1) — 「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観—

越中 康治¹・杉村伸一郎²

Formation Processes of Kindergarten Teachers' Views of Nature (1) : Experienced Teachers' Views of Nature

Koji Etchu¹ and Shinichiro Sugimura²

In order to clarify formation processes of kindergarten teachers' views of nature, we conducted semi-structured interviews with kindergarten teachers. The purpose of this first report is to show experienced teachers' views of nature. The results of the interviews indicate that experienced teachers believe that: (1) human beings are originally embedded in nature; (2) nature brings varied materials that provide humans with a wealth of experience; (3) experiences in nature are important especially for young children.

Key Words : kindergarten teacher, views of nature, semi-structured interview

問題と目的

幼児期における自然とのかかわりの重要性については、古くから多くの人々がこれを唱えている(井上, 2003; 野田, 2001)。とりわけ、我が国における保育は、海外の近代教育の思想家であるルソー、フレーベル、ペスタロッチらの思想・自然観を綿々と受け継ぎ(永野, 2006; 大方, 2001)、伝統的に子どもと自然とのかかわりを重視してきた(井上・無藤, 2003)。そして、経験的事実から、子どもと自然とのかかわりの意義として「科学性の芽生え」と「豊かな人間性の涵養」の2つを確認してきた(井上, 2003)。

他方、従来の保育学・心理学研究においては、子どもが自然にふれたりかかわったりすることにより、どのような体験が生じ、何がはぐくまれるのかは組織的に明らかにされておらず、自然体験の効果すら実証されてこなかった(杉村・山崎・財満・林・松本・三宅・菅田・落合, 2007)。例外的に、幼児期における自然体験活動(キャンプなど)の効果に関する研究

(若杉・川村・山田, 1997; 山本・平野・内田, 2005)はなされているものの、「自然とかかわる保育」でどのような力が育つのかということについて、客観的データに基づく実証的研究はなされてこなかった(田尻・無藤, 2005)。

実証的研究がなされてこなかった一因として、教育効果を客観的に数量化してとらえることが困難な幼児教育の本質的なあり方がある(田尻・無藤, 2005)。この点を踏まえ、近年、田尻ら(田尻・鬼頭・石坂, 2006; 田尻・鬼頭・石坂・亀ヶ谷・無藤, 2007; 田尻・無藤, 2005)は、「自然とかかわる保育」で育つ力という捉え難い問題を、「保育者の実感」に基づいて検討することを試みている。保育者を対象とした質問紙調査の結果から、「自然とかかわる保育」に意識的に力を入れている場合には、子どもたちの育ちにポジティブな影響が示される可能性(田尻他, 2006)などが示唆されている。こうしたことから、保育者がどのような自然観を有しているかは、極めて重要な問題であるといえる。

ところで、田尻らは「自然とかかわる保育」に関する「保育者の実感」を質問紙調査から量

1 山口大学教育学部

2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

的にとらえているが、面接法などを用いて保育者の自然観・保育観について質的な検討を行うことも極めて重要であると考えられる。例えば、杉村他（2007）が指摘するように、幼児期における自然体験の重要性については、幼稚園教育実習生でもこれを強く認識している。実習生と熟達した保育者との違いは、量よりも質からとらえるべき問題であろう。熟達した保育者がどのような自然観・保育観を有しているかを、それらの形成過程も含めて質的に明らかにしていく必要がある。

保育者に対して面接法を用いることの意義は、梶田・杉村・後藤・吉田・桐山（1990）からも明らかである。梶田他（1990）は、保育者の持つ保育についての見方・考え方が、その個人の成長・発達のプロセスと深いつながりがあるということを指摘し、保育者の「個人史」を研究している。すなわち、保育経験の豊かな保育者に自らの保育の方法と自分の生育史、学生生活、若い頃の保育などを個別に語ってもらい、その資料をもとに保育観の形成についての質的分析を試みている。結果として、専門職としての保育観は、①まず、学生時代に形成され、②就職後の同僚の影響、③保育者自身の結婚出産、④子どもとの出会いによって変化することなどが見出されている。

「自然とかかわる保育」に関する保育者の意識、保育者の自然観・保育観及びそれらの形成過程を明らかにする上で、保育者の「個人史」を研究するアプローチは極めて有効であると考えられる。そこで、我々は、梶田他（1990）を参考に、保育者の現在の自然観・保育観とそれらの形成過程を明らかにすることを目的として、複数名の熟達した保育者を対象に、半構造化面接を実施してきた。本稿では、一連の研究の端緒として、熟達した保育者が語る現在の自然観・保育観について、面接結果の報告及び分析を行う。

方 法

調査協力者

東広島市のH幼稚園に勤務する教諭4名（A教諭、B教諭、C教諭、D教諭）、養護教諭1名（E養護教諭）、副園長1名（F副園長）を対象として、2007年8月から9月にかけて個別に面接を実施した。なお、H幼稚園は、園舎の周りが山で囲まれており、園庭と山とを行き来することが可能な、極めて自然に恵まれた環境

にある。また、2006年度からは「森の幼稚園」構想の実現に向けて基盤整備とカリキュラム開発を開始していた（面接実施時は研究実施2年目であった）。

手続き

保育者の自然観の形成過程を検討すべく、1人2時間程度、個別に半構造化面接を実施した。面接者は第1著者と第2著者の2名（D教諭の面接は第1著者のみ）であった。面接の記録は調査協力者の許可を得て録画（ビデオカメラ）と録音（ICレコーダー）によった。なお、本稿の作成にあたっては、調査協力者に対して事前に了承を得た上で、次の2つの段階を経て研究公表の了解を得た。第1に、本稿の結果に記す「各教諭の回答の抜粋」及び経歴に関する記述について、調査協力者ごとに個別に確認を求めた。その際には、記述を修正・削除する必要はないかなどの確認を行った上で、必要に応じて結果の記述を改め、公表の了解を得た。第2に、投稿に先立って、本稿の内容全体についての確認を求めた上で、最終的な公表の了解を得た。

質問内容

保育者の「個人史」を通して保育観の形成過程を明らかにした梶田他（1990）を参考にして、下記の質問項目を予め準備した。

(1) 現在の自然観・保育観

①現在の自然観：「先生の自然観について伺います。先生にとって自然とはどのようなものですか」

②現在の保育観：「先生の保育観について伺います。先生にとって保育とはどのようなものですか」

③幼児期の自然体験の重要性：「幼児期の自然体験は重要ですか。また、何故、幼児期の自然体験が重要なのですか」

(2) 新任の頃の自然観・保育観

①新任の頃の自然観：「先生の新任の頃の自然観はどのようなものでしたか。今の自然観と違いはありますか」

②新任の頃の保育観：「先生の新任の頃の保育観はどのようなものでしたか。今の保育観と違いはありますか」

(3) 個人史の振り返り（子ども時代～学生時代）

①子ども時代の振り返り：「先生は子ども時代にどのような自然体験をされましたか」

②保育者を目指した理由：「先生は、いつ頃

から、なぜ保育者になりたいと思われたのですか」

③学生時代の振り返り：「学生時代に、自然観・保育観に影響を受けたこと（先生との出会いなど）はありますか」

(4) 個人史の振り返り（就職後～現在）

①H幼稚園以前：「就職後（H幼稚園以前）に、先生が現在の自然観・保育観を形成される上で、影響を受けた人はいますか」

②H幼稚園以後：「（H幼稚園における）森の幼稚園に向けての取り組みの中で、自然観・保育観に変化は生じましたか。また、園（H幼稚園）の方針に対する理解や受け止め方・人間関係などは、経験とともにどのように変わりましたか」

③同僚とのかかわり：「先生と（H幼稚園の）他の先生方の自然観・保育観で共通するのはどんなところですか。また、先生と他の先生方の自然観・保育観で違いがあるのはどんなところですか」

④子どもたちとのかかわり：「園の子どもたちとのかかわりの中で、印象に残る自然体験はありますか。また、園の子どもたちとのかかわりの中で、自然観・保育観は変容しましたか」

(5) 個人史の振り返り（その他）

①保育者自身の子育て：「ご自身の子育ての中で印象に残る自然体験はありますか。また、ご自身の子育ての中で自然観・保育観に変化は生じましたか」

②教育要領の変遷：「これまで、幼稚園教育要領改訂の際に、保育のあり方や自然の扱われ方が変わったと感じることはありましたか」

③社会の変化：「教育行政あるいは社会の変化の中で、自然観・保育観に変化は生じましたか」

(6) 現在の自然観の形成に至った転機（まとめ）

①「改めて伺いたします。先生の現在の自然観・保育観はどのようなものですか」

②「先生が現在の自然観を形成される上で、一番大きなきっかけとなったのはどんなことですか」

③「保育者として、いつどのような勉強が必要ですか？ 学生・新任保育者へのアドバイスはありますか」

なお、本稿では、熟達した保育者が語る現在の自然観・保育観について結果の分析を行うことを目的としていることから、「(1) 現在の自然観・保育観」に関する3つの質問（①現在の

自然観、②現在の保育観、③幼児期の自然体験の重要性）に対する保育者の回答を中心に取り上げる。

結果

「(1) 現在の自然観・保育観」に関する3つの質問（①現在の自然観、②現在の保育観、③幼児期の自然体験の重要性）に対する各教諭の回答の抜粋を以下に示す。

A教諭が語る現在の自然観・保育観

A教諭（女性）は保育経験12年（H幼稚園4年目）であり、面接実施時は3歳児クラスを担当していた。

①現在の自然観（先生にとって自然とは？）
そうですねえ、自然…。なんかこう、計り知れないものというか…。自分で、こういう、例えば何か対象物があって、ここに「こういうイメージがある」とか「こういう感触がある」とか「こういう使い方ができる」っていうものをもって触れても、それ以外のものが、毎回毎回、形を変えて見えてきて…。とってものなんかこう、なんか変化していく。その時と場所と時間と、その時の自分の年齢とか、いろんなあらゆる環境によって、見方が変わったり、扱いが変わったりということ、すごく奥深い。ただ一つのものでも、奥深い感じをいつも受けるものかなと思います。

②現在の保育観（先生にとって保育とは？）
うちの幼稚園の保育内容とも絡むかと思うんですけど、やっぱり保育者がいろいろ提案していく部分もあるけど、子どもたち自身が遊びをつくり出していくとか、自分たちの思いや願いが達成されていくってことができる保育であり、幼稚園であるべきかなと思うし…。「自分たちが生活をしている」「遊びをつくり出している」ということを感じることで、「自分たちでつくり出す場なんだ」とか「動き出さないと何も始まらないんだぞ」っていうことがしっかりと感じられる…。でも、それが放任とかっていうわけではなくって、自分たちでなんとかつくり出していく過程とおもしろさが味わえるところが保育っていうか、幼稚園であるかなと思います。

③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要ですか？）
そうですね。あの私、ちょうど幼児期と小学校低学年はほんと田舎で過ごして、逆に高学年とか社会人になるく

らいまでは大都会で過ごしてきたので…。その違う2つの環境の中で自分が育ってきてるので、今仕事しながら、「あっ、この感触はあれだった」って思い出して。すごく自分の経験であるとか、知識とかがよみがえってくるのが、やっぱり幼少期の泥んことか土とか草むらとか山の中とかそういうことで経験したものが鮮明に印象に残っていて、ある場面を見たときにパッとよみがえってくる場であり、いろんな感激を受けるんですね。

都会で過ごしたときに、土のない生活に私は耐えられなくて、小さかったのもあって、すごくストレスになったり、イライラしたり、そういう自分の精神的なストレス的なものがすごくたまっていくのも自分の中で感じていた部分もあって、いろんな心の安定であるとか安心感、心の育ち、自分で得ていだけじゃなくて、内面的な育ちも大きい環境になっていくのかなと思います。

B 教諭が語る現在の自然観・保育観

B 教諭（女性）は保育経験23年（H幼稚園16年目）であり、面接実施時は4歳児クラスを担当していた。

①現在の自然観（先生にとって自然とは？）今は、自然っていうのが、「自分にとって心地よい存在である」っていうことですかね。で、その中にいると心地よい…。それが自然かなと思います。

②現在の保育観（先生にとって保育とは？）私にとって保育っていうのは、「子どもの育ちを見つけられたらいいな」と思って。（子どもの育ちを見つけていくことですか？）ええ。見つけていくことかなと思いますね。

③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要ですか？）ええ、私は思います。先ほども申し上げましたけど、心地よいという体験がね、原点となって、そこからいろいろその人なりの自然観を構築していくのかなって思います。（何故、重要なのですか？）何が大事なのかって…、幼児期に自然の中に、空気を含めて、そこにいたり…、出来事でもいいし、触覚でも匂いでもなんでもいいから「快（かい）」と思っていて、大人になったときに「あ、こんなことがあったな」って思い出せる…。自然体験っていうのが、大人になったり…、そういうときにも辿っていくとそこにあるという…。自分の生きる道を…、見据えていく原点になるん

じゃないかな。

C 教諭が語る現在の自然観・保育観

C 教諭（女性）は保育経験27年（H幼稚園14年目）であり、面接実施時は5歳児クラスを担当していた。

①現在の自然観（先生にとって自然とは？）自然はね、そうですね、やっぱり自然はいつも私の生活の中にある。朝が来て、「あ、今日はいい天気だな」とか「今日も雨なんだな」とか、そういうことすごくなんか、自然の中でほんとに生かされてるって気がしますし…。朝起きて外に出てね、ちょっと1回深呼吸するんですけど、新聞を取りに行ったときに深呼吸するんですけど、周りを山に囲まれてますものですから、鳥の音がしたりするんですね。だからすごくなんか、へんな言い方だけど、「今日も生きてる。私も生きてるし、いろんな自然が生きてるな」ってことを感じます。

②現在の保育観（先生にとって保育とは？）仕事でもありますし、楽しみでもあるし、ある意味苦しみでもありますよね。つらいこともありますよね。どういう風に…、子どもと…、向き合ってるんだけど、子どもがなかなかつかめなかったり、子どもとなかなか信頼関係を結ばなかったり。だからやっぱり人として向き合っていくひとつの、楽しくもあり苦しい仕事ですね。でも、ライフワークだしね。私ずっとおかげさまでやらせていただいているから、ライフワークなのかなって思います。

③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要ですか？）思います。自分自身の幼児期の自然体験の記憶はないんですけど、小学校くらいからの記憶はあるんですね。いろいろ自然体験の、例えば田んぼで遊んだり、蓮華をつんだり、蓮華の蜜を舐めてみたりとか、川でめだかをすくって帰ったり、道草をいっぱいして帰ったことを覚えているんですね。だから、たぶん、その記憶はあるんですが、その前の記憶もたぶん自然に囲まれた生活だったんだろうと思うんですね。だから自然の中でずっと過ごしてきた記憶があるので、幼児もきっとそういう風な記憶、体験がいっぱいあったんだろうなと思うし、それはとても楽しいことだったので…。

ただ、女の子ですから、そんなに虫取りをしたりとかいうことはなかったんですけど、夏になったら蝉時雨がね…。「ああ夏が来たな」って

思いますし、秋になったら虫が鳴くと「ああ秋になったな」って思うし、冬になったら雪が降って「寒いけど寒い中を歩くの気持ちがいいな」って思ったり、春になったらあったかくて「花がたくさん咲くし気持ちいいな」っていう記憶が、小学校からはありますから、たぶん幼児体験も…。「たぶんそういう風な自然に囲まれた生活をしてたんだろうな」って思いますから。やっぱり自然は好きですね、どっちかっていうと。だから大切だと思います。

D 教諭が語る現在の自然観・保育観

D 教諭（男性）は保育経験16年（H幼稚園12年目）であり、面接実施時は大学院にて内地研修員として1年間の研修中であった。

①現在の自然観（先生にとって自然とは？）
自然は、うーん…。「自然の中に自分はいる」っていうのが一番の感覚ですかね。ほんとに感覚、感じてるかわかんないですけど、少なくとも自然観って言われれば、自然の方が人間よりは大きい。不等号で言うとね。「自然 > (大きい) 人間」みたいな感じで。大きいっていうか、含まれているっていうかね。人間はその一部だっていうのが、なんか一番思ってることですかね。

だから、「すごく嫌いな言葉は「自然保護」とかね。「自然を大事にしよう」っていうようなことが標語になってくるのは、なんかちょっと根本的に間違ってるんじゃないかなっていう感覚はありますけどね。まあ、だから自然観って言ったらそんな感じで。まあ、「人間も動物であり自然の一部であるっていうことから離れすぎていってるんじゃないかな」っていうことが今思うことだし。もちろん利用っていうかね、人間もいろんな動物も利用するんだけど、自然っていうかいろんな恵みっていうのを…。でも、人間が利用するためにあるのでは…、「根本的に違うんだ」っていうところが自分なりの思いですかね。

②現在の保育観（先生にとって保育とは？）
うーん、保育はねえ、保育はやっぱり人が人になっていく道だと思っただよ。その過程、幼児期の過程が保育だと思っただよ。で、まあ、今の自然のこととちょっと絡めて言うと、やっぱり人が人になるように一応なってるんだと思っただよ。でもそのために、何て言うのかなあ、人らしく生きていけばほんとに人になっていく。その時期らしい生き方をしていけば

ね。まあ、人間、大人っていうかな、人間になっていくんだと思うけど、逆になんかそれがしにくい。

今、いろんな余計な情報があったりとか、まあ自然に生きにくい状況があるので、なるべく保育っていう中で、何て言うのかなあ、本来の人間らしい生活っていうのかな、幼児期だったら遊びだったりとかね、自分の力、いろいろ出してみたりとか、ある意味科学的じゃないにしても、子どものイメージだったりとかね、そういう中で生きるっていう生活をするっていうことが、大人になっていくために、保育っていう上で一番大事なのかなっていう風な感じですかね…。一言で言えたかな（笑）。

③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要ですか？）もちろん大事だと思いますね。さっきの話とほぼ同じなんですけど、やっぱり例えば、家の中においてね、いろんな子どもを育てる教材とかさ、あったにしても、やっぱり自然っていうのは法則だと思っただよ。やっぱりこういう風に生きていくという、まあ、自ずからそうなっていくという道筋があるんだと思っただよ。そこからやっぱりずれていることが多いかなって思っただよ。ね。（ずれているというのは？）まあ、社会かなあ。人間が、大人がね。普通に考える価値観なりっていうのが多少ずれてるっていうこともあるだろうし。もちろんお金儲けのためにいろんな教材開発していく上でね、子どもが喜ぶものっていうので作っても、本来、自分の力を出して遊んだりとか、イメージ働かせたりっていうところ、まあうまくリンクさせようとして作ってるものもあるけど、ほんとに子ども自身から生み出されるっていうか、そういうものからずれてることもあるような気がするんですよ…。

そういう意味で自然の中にいると本来のね、野性の力というか、自分の中の人間…、その子の持っているものが発揮されやすいと思っただよ。そういう意味で、その中におるときにいろんな形で自分の力が発揮されるし、本来的に生き生きとしてるというようなね、体験が、自然の中でしかできないとは全然思わないけど、自然の中ではすごくやりやすいし、自然とできるっていうかね、それこそ。そんな感じだからやっぱり自然っていうのは大事だよなあって、本来の人間にかえるようなねところもあるのかなって気がします。

E 養護教諭が語る現在の自然観・保育観

E 養護教諭（女性）はH幼稚園2年目であり、それ以前は小学校に19年勤務していた。

①現在の自然観（先生にとって自然とは？）
そうですね、自然っていうものをあまり子どものときに意識したことがなかったんですよ。（中略）

（今はどうですか？）そうですね、やっぱり大人になって、街がどんどん開けて、周りの自然がなくなっていくのを目の当たりにすると、やっぱりこれじゃあまずいんじゃないかなって。それから環境問題についても新聞やテレビなどいろんなところで取り上げられるようになりましたよね。そうしたときに、「ああ、今まで自分は、自然っていうもの、その大切さみたいなものをあまり意識せずに生きてきたけれど、やっぱり大事なんだな」って、意識がだんだんと変わっていったんですね。それから今度は、小学校とか幼稚園とかに指導者側としていった時に、自分の子どもの頃を棚に上げて、少し自然の大切さみたいなことを語っているような気がします。

（自然についてネガティブな印象とかは？）
どちらかという、そちら（ネガティブな印象）の方が強かったんで、自分の方から積極的に自然に向かっていかなかったんですけれども…。ですけれども、やっぱり人間は、そういった自然の中の一部だっていう風に思うように頭の中でチェンジしていったのは、たぶん、感性からじゃなくて、知識からのほうだと思うんですけどね。やっぱり食べることにしてもですね、人間は生き物を食べて生きているわけですから、農薬のこととか、そういったところから、もう1回こう、土へ返っていくっていうんですか、意識がね。意識がそういったところへ帰っていくっていう感じですかね。

②現在の保育観（先生にとって保育とは？）
保育っていうのは子どもを守り育てる、お世話をするっていうイメージが強かったんですけども、幼稚園ではそれはどちらかという保護者の役割で、幼稚園っていうのはもう少し違った、何かを教えるところではないかと思ってたんですけども。でも、保育ですよ…。（まあ、この幼稚園でやってるようなことを保育と考えていただいて…）ここでやってる活動すべてを保育って考えるんですね。はい、わかりました。

あの、大切なものだなということ、改めて感じました。昨年度、小学校と幼稚園の連携というところで、幼稚園から小学校へ何をつないでいかってという問いがあったときに、しゃべりながら自分の中で頭の中で整理をしていったんですけども、小学校に入って子どもたちが指示されたことはよくできるんですけども、自分から何かを見つけてとか、根気強くとか、それからすごく目をきらきらさせて興味関心をしっかり持って何かに取り組むっていう姿勢は、少ないような気がしてたんですね。それで、自分の調べたいことを調べていくっていう活動を課題として与えたときに、気持ちを高い状態に保ちながら、それを一生懸命する子としない子の差はどこにあるのかなあって考えたんですね。

それで、この幼稚園に来て、子どもたちが、自分の興味関心があるものに、ずっと入り込んでいく姿を、いろんなところで見られるんですけど、それは虫であったり、砂場の遊びであったり、いろいろあるんですけど、あの、とことんやるっていうか。小学校みたいに、時間で切られませんか。一応10時半になったらお部屋に入らないといけなから、自分の活動はそこでちょっとやめなければいけないんですけども、それにしても、結構、8時半くらいから2時間くらいは没頭できますよね。その時間ずっと自分の興味のあることにとことん入り込んで、浸って遊ぶって言うんですかね。ああいった経験っていうのはとっても大事なんじゃないかなあって。それはここにきて思いました。（後略）

③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要ですか？）
幼児期の自然体験ですよ。あの、私は幼児期に、自分がそういう虫とか植物とかっていうのにあまり興味を持たなかったんで、そのまま、あまり、その世界を知らずに大きくなった、大人になったって気がするんですけど…。例えば、自分の周りにもものすごく虫に詳しくって、お友達でもいいんですよ、（中略）誰でもいいんですけども、そういう虫のおもしろさとか、植物の、生きるためのすごい仕組みみたいなものですね、そういったことについて、話してくれるっていうかな、語ってくれる人がいたら、もう少し自分が、ぐっと、そちらの方に目を向けて見ていたかもしれないし、もしかしたらもっと好きになってたかもしれない…。（中略）

子どものときって感覚から入るから、大人の

知識から入って感動するのと違うのかなって思うんですけど、私なんかはここ（H幼稚園）に来て、〇〇先生（外部の講師）から植物の生きていく仕組みについてお話を伺ったときに、ほんとにこんな小さな命ですけども、「なんと人間の頭では考えられないような自然の仕組みってというのが、そこに存在してるんだ」って感動したんですよね。だからそういったことをもっと早くに知っていたら、違っていたかなって思うんですけど。

F 副園長が語る現在の自然観・保育観

F副園長（女性）は20年の保育経験の後、教育委員会（9年）を経てH幼稚園の副園長となり2年目であった。

①現在の自然観（先生にとって自然とは？）ははっきり申しまして、保育観っていうものは絶えず持ってきたつもりです。だけど自然観っていうのは、こちらに来て強く思うようになったものです。で、やっぱりこの幼稚園に来させてもらって、「自然の中で育つ部分の大きさ」っていうのを、自分自身ですけども、子どもを介して見ることができ、今では、今ではって言うか、幼児教育は教科書がない分、自然に学ぶべきものだという風に思っています。

②現在の保育観（先生にとって保育とは？）（前略）なんか、大学生の頃って頭でっかちになるじゃないですか。（中略）昭和5X年の採用でしたけども、当時、やはりまだ一斉活動が公立幼稚園は主流の時代でしたから、そこでH市に入ったときに、もう、いっぱしのつもりで、やっぱり「自由の中で子どもが主体的に遊びを通して学ぶ場所である」というようなことをいっぱしに言って、言った関係上それを貫き通してるところがあります。

ただ、そうは言っても、平成元年の改訂、それからまた平成10年の教育要領の改訂に伴って、どっちかって言うとやっぱり「私のやったことは間違いなかったんだ」という気持ちもあったけども、そのやり戻しも今ある中、それでまた教育委員会に入って指導的な立場に立ったときに、やっぱり指導力のない先生にとっては自由保育っていうのは、とってまじじゃないけどやっていけない保育内容・保育の仕方、やっぱり指導力がない先生にとっては一斉であるとか、何かマニュアルがあってそれに依拠して進めていくほうが無難かなっていう思いもあって…。指導する立場になったときに、自分が思

ってたポリシーはポリシーとしてあるんだけど、そのバランスですよ、みたいな言い方になってる時代が、ここ何年かありました。だけど、保育自体はとても楽しいことですし、先生と子どもが、その、ほんと、一緒に作り出していける、創造的な活動だという風に思ってます。

③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要ですか？）うん、重要ですね。なんで重要なかって言ったときに、その、「環境による教育」だっていうのが幼児教育は、まったくそのとおりだと思うところですよ。そうしたときに、あくまでも用意できる環境には限界があって、「自由性」とかいうのをいっぱいもたせたような素材、いろんな見方ができるような素材を提供したり、場の設定をしたりしてるんだけど、それにも限界があると思ってるんです。そうしたときに、自然っていうのは、いくらこちらが思っても、その通りにはなっていない。それで、意外性っていうんですかね、たまたま行ったら大きなカブトムシに出会ったとか、まったく歩いて何にも見つからないときとか。で、予測できない部分に、先生も「今日は何が起こるんだろうか」ってことを期待できるし、子どもも他の素材にないものを感じてるんだと思うんです。だから、本当に、どう言えればいいのかな、自由なんです。自由じゃなくて自然なんです。つくられたものではないというところの意外性が素晴らしいんだと思います。

考 察

本稿の目的は、熟達した保育者の現在の自然観・保育観を検討することであった。以下では、3つの質問（①現在の自然観、②現在の保育観、③幼児期の自然体験の重要性）に対する各教諭の回答をもとに検討を行う。順序が前後するが、はじめに「②現在の保育観」を検討し、その後、「①現在の自然観」及び「③幼児期の自然体験の重要性」に関する回答を検討する。

現在の保育観

現在の保育観に関する保育者の回答は、次の2つのタイプに大別できると考えられる。第1は、「子どもが主体である」ということに関する言及である。具体的な発言としては、「保育者がいろいろ提案していく部分もあるけど、子どもたち自身が遊びをつくり出していく（A教

論)],「自由の中で子どもが主体的に遊びを通して学ぶ場所である (F副園長)」などが挙げられる。第2は、「子どもを見る, 子どもと向き合う」ということに関する言及である。具体的な発言としては、「子どもの育ちを見つけれたらいいな (B教諭)],「(子どもと)人として向き合っていくひとつの, 楽しくもあり苦しい仕事 (C教諭)」などが挙げられる。

これらの2つのタイプの回答は, 表現こそ異なっているものの, 本質的には同義であると考えられる。F副園長が「③幼児期の自然体験の重要性」の中で言及している通り, 幼稚園教育は「環境による教育」を基本としている。幼稚園教育要領解説(文部省, 1999)にある通り, 「環境を通して行う教育は, 幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つもの」(p. 22)であり, 「教師には, 常に日々の幼児の生活する姿をとらえることが求められる」(p. 23)。すなわち, 「子どもが主体である」ことと「子どもを見る, 子どもと向き合う」ことは, それぞれ環境による教育を構成する上での必須の要件である。

また, 「環境による保育」は「子どもの内面から育つ力を信頼」(児嶋, 2004, p. 131)することが根幹にあるが, D教諭も, 「保育はやっぱり人が人になっていく道, 「やっぱり人が人になるように一応なってる」と子どもの育つ力を信頼した発言をしている。さらに, 小学校経験の長いE養護教諭は, 小学校における教育との比較から「自分の興味のあることにとことん入り込んで, 浸って遊ぶって言うんですかね。ああいった経験っていうのはとっても大事なんじゃないかなあ」と, 「子どもが主体である」ことの意義を認める発言をしている。以上のことから, H幼稚園の保育者は「環境による教育」のとらえ方, ひいては保育観の基礎的な部分を共有していると考えられる。

現在の自然観

現在の自然観に関する保育者の回答も, 2つのタイプに大別することができた。第1は, 「自然の中にいるという感覚」に関する言及である。具体的な発言としては, 「その中にいると心地よい (B教諭)], 「自然の中でほんとに生かされてる (C教諭)], 「自然の中に自分はある (D教諭)], 「人間は, そういった自然の中の一部 (E養護教諭)」などが挙げられる。特にD教諭は「人間も動物であり自然の一部で

あるっていうことから離れすぎているんじゃないかな」と発言している。

第2は, 「対象・素材としての自然」に関する言及である。具体的な発言としては, A教諭の「何か対象物があって, ここに『こういうイメージがある』とか『こういう感触がある』とか『こういう使い方ができる』っていうものをもって触れても, それ以外のものが, 毎回毎回, 形を変えて見えてきて…」が挙げられる。また, F副園長は「幼児期の自然体験の重要性」に関する回答の中で, 「(自然の) 予測できない部分に, 先生も『今日は何が起ころんだらうか』ってことを期待できるし, 子どもも他の素材にないものを感じてるんだと思う」と言及している。

これらの2つのタイプの回答は, 「自然」に対して, それぞれ異なる視点から言及がなされているようにも見て取れる。「自然」という語は, 一般に「天体・山川草木・動物など, 人間社会を取り巻くもの」を意味し, 「狭義では人間(の営み)と対立し, 広義では人間(の所産)も含む」(新明解国語辞典, 2005, p. 625)とされる。これに従うと, 「対象・素材としての自然」についての言及は狭義の自然を, 「自然の中にいるという感覚」は広義の自然を意味しているといえるかも知れない。保育者が自然をとらえる視点には「自然を対象としてとらえる視点」と「人間を含めて自然をとらえる視点」の2つがある可能性が示唆される。

ただし, 2つの視点が認められたということは, 保育者の自然観が2つのタイプに大別されるということの意味するわけではない。例えば, D教諭とE養護教諭はいずれも「人間は自然の一部」という主旨の発言をしている。しかしながら, 環境問題や自然保護といったことについて, E養護教諭が, 新聞・テレビ等での環境問題の見聞から「やっぱり(自然は)大事なんだな」と思ったと発言しているのに対し, D教諭は「『自然を大事にしよう』っていうようなことが標語になってくるのは, なんかちょっと根本的に間違ってるんじゃないか」と発言している。こうした点からも, 保育者間で自然観に共通する部分と異なる部分とがあることが示唆される。

幼児期の自然体験の重要性

幼児期の自然体験の重要性に関しては, 保育者全員がこれを強く認識していた。重要とする

理由についても、保育者の回答は2つのタイプに大別することができた。第1は、「自身の幼児期の実体験に基づく認識」である。A教諭は、保育に従事する中で「あっ、この感触はあれだった」と幼少期の経験がよみがえってくることに、B教諭は、幼児期に「快(かい)」と思ったことを、大人になったときに思い出せるということに、C教諭は、自然の中でずっと過ごしてきた記憶があり、それが「とても楽しいことだった」ということに言及している。また、E養護教諭は、幼児期に自然とかかわる機会があれば、自身も自然を「もっと好きになってたかもしれない」と回答している。

第2は、「自然のもつ教育的な力に基づく認識」である。F副園長は「自然の中で育つ部分の大きさ」に言及し、「幼児教育は教科書がない分、自然に学ぶべきものだ」としている。さらには、「環境による教育」との関連から、「他の素材にない」自然の「自由性」「意外性」に言及している。また、D教諭は、人間(の発達)を含めて「自然ってというのは法則」としつつ、「自然の中にいると本来のね、野性の力というか、自分の中の人間…、その子の持っているものが発揮されやすいと思う」と発言している。これらの理由づけと自然観との関連については、今後、各保育者の個人史の観点からより詳細に検討していく必要がある。

まとめ

そもそも「森の幼稚園」とは、倉橋惣三が29歳当時に発表した教育小説の表題である。作品中の「園芸家(園芸主任の花田君)」に対する「森の先生」の語りかけ、「ねえ君、温室のように無理強いに咲かすのでもないし、とって勿論、野原のように野生のまま放任して置くのでもなし、自然に生長して、自然に咲くべきものに、適当な培養を与えるのが君の仕事でしょう。つまり幼稚園なんだねえ」(倉橋, 1912, p. 87)などからも、今日の「環境を通した教育」に通ずる、倉橋の幼児教育理論の原点を見ることができる(栗原, 1994)。また、倉橋(1918)は、「教育者が子供と一致し得るためには自然と一致し得る人でなければならぬ」(p. 22)とも語った。こうした倉橋の自然観・保育観なども、今日の「森の幼稚園」の保育者たちに少なからぬ影響を及ぼしているものと推察される。

いずれにせよ、本稿において各保育者の現在の自然観・保育観に関する発言を分析した限り

では、保育者間で共通する部分も多いことが見てとれた。ただし、自然観に関する発言からは、「自然を対象としてとらえる視点」と「人間を含めて自然をとらえる視点」とがある可能性が示唆された。この点については、我々日本人が有する一般的な自然観の観点から考察を行なう必要がある。

伊東(1995)は、地球規模の環境破壊の一因として「近代ヨーロッパに発した自然征服的な自然観」(p. 479)があることを指摘しつつ、「従来支配的であった西欧的自然観に対し、非西欧世界の伝統的自然観をあらためて顧みってみる」(p. 479)こと、「日本人の自然観」を再検討することの必要性を強調している。日本人の自然観に関する一般的な見解として、例えば梅原(1995)は、その根底に「死ねばあの世に行つて、あの世からまた帰ってくる」(p. 26)、「花は散り、春になるとまた咲き、動物も死んではまた、生まれてくる」(p. 26)といった縄文時代からの世界観・循環の思想があることを指摘している。

また、木田(2007)は、プラトン以降の西洋哲学に見られる「超自然的な原理を参照にして自然を見る」(p. 21)という思考様式を「特異」なものと指摘しつつ、古代日本人の自然観について、古代ギリシア人の自然観と同様に「アニミズムの洗練されたもので、そう珍しいものではありません」(p. 23)と指摘している。その上で、古代日本人の自然観のもとでは、「人は、自然のなかから生まれ出て、また自然にかえってゆく存在」であり、万物と同様に「自分もまた生成消滅する自然の一部」(木田, 2007, p. 23)であると考えられていたに違いないと指摘している。

こうしたことを踏まえると、本研究において一部の保育者が示した「人間を含めて自然をとらえる視点」は、日本人の伝統的な自然観と一致しているといえる。それでは、もう一方の保育者が示した「自然を対象としてとらえる視点」が日本人の伝統的な自然観と異なるか、西欧的な自然征服的な自然観かということ、そうではない。寺田寅彦(1935)が指摘したように、日本の自然は「住民に無限の恩恵を授けると同時にまた不可抗な威力をもって彼らを支配する」(p. 250)のものであり、日本人は「この自然に服従することによってその恩恵を十分に享受することを学んで来た」(p. 251)のである。さらに寺田(1935)は、「日本の自然は西洋流の分析

的科学の生まれるためにはあまりに多彩であまりに無常であった」(p. 246)と評しつつ、こうした日本の自然の「多様性と活動性」が、日本人の「自然の驚異の奥行きと神秘の深さに対する感覚を助長」(p. 236)したと指摘している。こうした寺田の言説を踏まえると、自然を対象としてとらえた時に、その多様性・意外性に驚かされるという視点もまた、日本人の伝統的な自然観と一致しているといえる。すなわち、日幼稚園の保育者は、保育観と同様に、自然観についても、その根幹を共有しているといえる。

以上、本稿では、熟達した保育者が語る現在の自然観・保育観について検討を行った。その結果として、自然観と保育観の双方について、熟達した保育者の基本的な共通性を見出すに至った。これを踏まえ、次稿以降では、各保育者の個人史の観点も含めて、独自性にも焦点をあてつつ、より詳細な分析を行う。

引用文献

- 井上美智子 (2003). 幼児期の自然とのかかわり いままでは(特別企画 幼児期と自然) 発達, **24** (96), 42-46.
- 井上美智子・無藤 隆 (2003). 幼児期の自然とのかかわり これからは(特別企画 幼児期と自然) 発達, **24** (96), 81-86.
- 伊東俊太郎 (1995). あとがき 伊東俊太郎 (編) 日本人の自然観 河出書房新社 pp. 479-480.
- 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子 (1990). 保育観の形成過程に関する事例研究 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, **37**, 141-162.
- 木田 元 (2007). 反哲学入門 新潮社
- 児嶋雅典 (2004). 環境による保育 森上史朗・柏女霊峰 (編) 保育用語辞典 (第3版) ミネルヴァ書房 pp. 131-132.
- 倉橋惣三 (1912/1965). 森の幼稚園 坂元彦太郎・及川ふみ・津守 真 (編) 倉橋惣三選集 第二巻 フレーベル館 pp. 83-106.
- 倉橋惣三 (1918/1965). 自然との一致 坂元彦太郎・及川ふみ・津守 真 (編) 倉橋惣三選集 第二巻 フレーベル館 pp. 22-23.
- 衆原昭徳 (1994). 間接教育の構造—倉橋惣三の幼児教育方法— ぎょうせい
- 文部省 (1999). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 永野 泉 (2006). 保育研究における環境論の比較 淑徳短期大学研究紀要, **45**, 79-88.
- 野田敦敬 (2001). 初等教育における自然体験の重要性 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **4**, 79-85.
- 大方美香 (2001). 21世紀に求められる生命の根源と教育—フレーベルの自然観に基づく— 大阪城南女子短期大学研究紀要, **35**, 49-58.
- 杉村伸一郎・山崎 晃・財満由美子・林よし恵・松本信吾・三宅瑞穂・菅田直江・落合さゆり (2007). 幼児期における自然体験の効果に関する実証的研究 (1) —教育実習生からみた自然体験— 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, **35**, 251-257.
- 田尻由美子・鬼頭弘子・石坂考喜 (2006). 「自然とのかかわる保育」で育つ力についての実証的研究 (その3) 日本保育学会第59回大会研究論文集, 582-583.
- 田尻由美子・鬼頭弘子・石坂考喜・亀ヶ谷忠弘・無藤 隆 (2007). 「自然とのかかわる保育」で育つ力についての実証的研究 (その4) 日本保育学会第60回大会研究論文集, 702-703.
- 田尻由美子・無藤 隆 (2005). 「自然とのかかわる保育」で育つ力についての評定基準と実証的研究の試み 精華女子短期大学研究紀要, **31**, 27-35.
- 寺田寅彦 (1935/1993). 日本人の自然観 小宮豊隆 (編) 寺田寅彦随筆集 第五巻 (ワイド版岩波文庫) 岩波書店 pp. 223-253.
- 梅原 猛 (1995). 循環の世界観—アイヌと沖縄の自然観の考察から— 伊東俊太郎 (編) 日本人の自然観 河出書房新社 pp. 7-27.
- 若杉純子・川村協平・山田英美 (1997). 幼児における自然体験と感性の関わり 日本保育学会第50回大会研究論文集, 690-691.
- 山田忠雄・柴田 武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (編) (2005). 新明解国語辞典 (第六版) 三省堂
- 山本裕之・平野吉直・内田幸一 (2005). 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, **5**, 69-80.

謝 辞

本研究にご協力を賜りました幼稚園の諸先生方に、心より感謝申し上げます。